國學院大學学術情報リポジトリ

杜甫「慈恩寺塔」詩をめぐって

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 川合, 康三, Kawai, Kozo メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000462

杜甫「慈恩寺塔」詩をめぐって

川合康三

はじめに

杜甫の02-07「諸公の慈恩寺塔に登るに同ず」詩[1]は、杜甫の詩のなかでもよく知られるものの一つである。杜甫には珍しく他の詩人たちと唱和した詩であることも、その詩が注目される理由であろう。同じ題材を三人以上の作者とともに作った作品としては、「慈恩寺塔」詩のほかに、これよりのちの左拾遺時代、朝廷の同僚たちとものした詩がある。それは初めに賈至が「早朝大明宮にて両省の僚友に呈す」を作り、それを承けて王維「賈舎人の早朝大明宮の作に和す」、岑参「中書舎人賈至の早朝大明宮に和し奉る」、そして杜甫の05-31「賈至舎人の早朝大明宮に和し奉る」が続き、以上四人の作がのこっている。

何人かの詩人が同一の場で同一の題材を詠じていれば、そこに詩人たちの差異を見たくなるのも当然であって、過去の批評のなかにもそれに注目した言説が少なくない。たとえば明の胡応麟は「慈恩寺塔」の詩については杜甫を推し、「早朝大明宮」の詩については王維を推す[2]。清の黄生は「高（適）・岑（参）皆な作有るも、皆な及ばず[3]」、沈徳潛は「慈恩寺塔」について杜甫を最も上位に置き、その下は岑参、さらにその下に高適・

儲光羲を置くというようにランク付けしている。[4] 仇兆鰲に至っては、杜甫の「慈恩寺塔」を「力量　人に百倍す」と絶賛する。[5] 楊倫『杜詩鏡銓』では「同時の諸作に視ぶるに、其の気魄力量、自づと郡賢を圧倒し、千古に雄視するに足る」とやはり杜甫の作を最上に推す。[6]

こうした批評に共通して見られるのは、いずれも作者の優劣を論評しようとしていることである。同題の作を並べて、諸家のできばえを評定している。文学の批評を作者や作品を評価することと取り違えるのは、今日でも免れがたい弊ではあるが、詩の批評は作品に点数をつけることではない。同一の対象を詠じながら、対象のうちの何を選び取るか、それをどのように描くか、そこに浮かび上がるそれぞれの詩人の特性を探ることこそが比較の目的でなければならない。ここでは「慈恩寺塔」詩を詠じた複数の作者の作品を取り上げて、作者ごとの差異、そこに浮かび上がる杜甫の個性を考察してみよう。

一、「慈恩寺塔」の作者たち

「慈恩寺塔」詩には、高適の「諸公の慈恩寺に登るに同ず」、岑参の「高適・薛拠と与に慈恩寺に登る」、儲光羲と杜甫の同題の「諸公の慈恩寺塔に登るに同ず」、以上の四首がのこっている。杜甫の詩題のあとには作者自身によると思われる原注が添えられ、「時に高適・薛拠、先に此の作有り」というのに拠れば、五人は同時に慈恩寺塔に登ってその場で作ったものではなく、高適・薛拠・岑参の三人がともに登り、岑参の詩題に「同ず」がないことをそのまま受け取れば、岑参がまず作った作に高適と薛拠が「同じ」、そののちに儲光羲と杜甫が「同じて」作ったものと思われる。杜甫の自注にいうように薛拠にも同題の詩があったはずだが、それはのこっていない。

詩題に「同」の字が加えられて、「……に同ず」というのは、緩やかな唱和の意味であって、題材を共有しながらも、詩型も押韻も一致することはない。儲光羲・杜甫がほかの三人より遅れて「登」ったにしても、その時間の差はさほど大きくはなく、ほぼ同時の作であって、互いに他の作を意識して作られたと考えてよいだろう。

彼らが相前後して慈恩寺塔に登り、その詩を作ったのは、天宝十一載（七五二）秋であることを、聞一多『岑嘉州繫年考證』が考証し、以後、諸注すべて一致するところである。十一載秋にはほぼ五人とも長安にいたようだ。当時の境遇をみると、高適（七〇四？—七六五）は四十九歳。天宝八載（七四九）

四十六歳で遅い進士登第を果たしたのち、汴州封丘県の県尉となったが、そこでの不満は「封丘作」「封丘県」などの詩に吐露されている。天宝十一歳の秋、県尉の職を棄てて長安へ移った。このあと、秋の終わりに河西に赴き、河西節度使哥舒翰の幕下に入る。慈恩寺を訪れたのは、長安にあってまだ河西に行く前の時期にあたる。

岑参（七一五―七七〇）はこの年三十八歳。これに先立って天宝八載、安西四鎮節度使高仙芝によって右威衛録事参軍に任じられ、節度使の掌書記に充てられていたが、天宝十載の秋に長安に帰る。そののち、天宝十三載に節度使封常清の幕下に入って北庭に赴くまで、長安にあった。

儲光羲（七〇七―七六〇）は開元十四年に進士及第、この年には四十六歳。薛拠は開元十九年に進士及第、天宝六載に風雅古調科に及第（『唐会要』巻七六）。この二人の事迹は定かでないが、少なくとも慈恩寺塔に登った天宝十一載に官に就いていた記録は見られない。そして杜甫（七一二―七六〇）は四十一歳、長安で求官の活動をしていた時期にあたる。

こうして一瞥してみると、五人とも四十歳前後のほぼ同じ世代であり、高適・岑参は官職についたことはあってもこの時期ははざまにあたり、杜甫はまだ無官。つまり年齢が近いのみならず、境遇のうえでもいずれも朝廷に確かな地位を獲得していないという点でほぼ似ていることを確認しておこう。

二、仏教的境地

慈恩寺の塔に登って詩を賦す際、四人に共通して描写の対象となるものは、仏教寺院であること、塔が高いこと、その二点がまず挙げられる。四人の作を並べて、まず気づくのは杜甫の詩には仏教に関わる言述が少ないかのような印象を受けることである。これについてすでに胡震亨の指摘がある。

高・岑終篇皆仏教語、杜則雑以望陵寢、嘆稲粱等事、與法門事全不渉。他寺刹及贈僧詩皆然。（『唐音癸籤』巻四）

高適・岑参は全篇みな仏教の言葉であるが、杜甫はというと陵や宮殿の眺め、稲粱を嘆くことをまじえ、仏門のことにはまったく言い及ばない。ほかの寺院や僧侶に贈った詩でもみなそうである。

しかし詩を読み返してみると、必ずしも胡震亨の言うとおり

になってはいない。仏教に関わる句は、高適は冒頭に、

1香界泯羣有　香界　羣有泯(ほろ)び
2浮圖豈諸相　浮図　豈に諸相ならんや

この境界では世俗的存在は消滅、仏塔も現象のままの姿ではないはず、とまずこれが仏教の世界にあることから唱い起こす。岑参は末尾の四句において、

19浄理了可悟　浄理　了として悟る可く
20勝因夙所宗　勝因　夙に宗とする所
21誓將挂冠去　誓ひて将に冠を挂けて去らんとす
22覺道資無窮　覚道　無窮に資せん

仏法の理をここで悟ったが、その因縁はもとより心を占めていたもの。仕官の道などは棄てて、無窮の仏道に帰依しよう、と結ぶ。俗界から離脱しようというのだが、この地の清浄な境地に浸った感銘を語るもので、必ずしも岑参が実際に仏道に入ろうとしたわけではない。儲光羲は二十二句の詩の終わり近くで、

19俯仰宇宙空　俯仰すれば宇宙空し
20庶隨了義歸　庶はくは了義に隨ひて帰せん

やはり仏道への帰依を述べるが、これも仏寺にあるがゆえに導き出された措辞ではある。そして杜甫は二十四句の初めに近い箇所で、

5方知象教力　方に知る象教の力の
6足可追冥搜　冥搜を追ふ可きに足るを

仏教の力を借りて「冥搜」を追い求めようという。この「冥搜」の語は、東晋・孫綽「天台山に遊ぶ賦」（『文選』巻一一）の序に「夫の遠く冥搜に寄り、篤く信じて神に通ずる者に非ざれば、何ぞ肯て遥かの想ひて之を存せんや」の用例がよく知られる。孫綽は不可視の世界に探索を伸ばして、宗教的な境地（彼の場合は老荘）に触れようというのであるが、「冥搜」の語は盛唐に至ると目に見えない世界までを探って詩句を求める方向で用いられる。そして実際、杜甫の「慈恩寺塔」詩は目前の建造物である慈恩寺塔から離れて、不可視の世界を搜求していく

ところにその特徴がある。

さて以上のように仏教に関わる詩句を引き抜いてみると、少なくとも句の数においては岑参が四句を連ねるほかは各人二句にとどまり、杜甫一人が少ないわけではない。また胡震亨が杜甫の詩には仏教に関わる語句が少ない代わりに、塔の上から見た御陵や宮殿の眺望が描かれるという指摘も、後述するように杜甫には御陵や宮殿の描写はなく、他の三人の詩にそれが見える。このように胡震亨が仏教への言及が杜甫に乏しいというのは当を得ていないのだが、にもかかわらず彼が指摘したような印象を我々も受けるのはなぜか。それは仏教世界を語る詩句の数ではなく、その重さの違いによる。高適は冒頭に置いて寺院・仏塔が仏の世界の顕現であることを初めに提示し、岑参、儲光羲は末尾で仏道への帰依を語るというように、いずれも大きな重みをもつのに対して、杜甫の場合は仏教的記述が重きをなしていないために、「法門の事と全く渉(かか)らず」といった印象を受けるのだろう。杜甫にあっても別の詩、01-01「龍門の奉先寺に遊ぶ」では、「覚めんと欲して晨鐘を聞けば、人をして深省を発せしむ」と、寺院に泊まったことで仏教的な思惟が生じたことを語っているが、この詩においては仏教に収斂することはない。他の三者にとっては、慈恩寺の詩のなかで仏教を語ることは当然と考えられたであろうが、杜甫のこの詩には宗教的な色彩は乏しく、それ以外の叙述へ、多様な内容へと拡がっていくのである。

三、塔の高いこと

慈恩寺塔を詠ずるにあたっては、当然ながら誰もが塔の高さに驚き、それを賛嘆する。しかし高さへの驚嘆をいかに書くかには違いがある。高適の詩はいきなり塔の上に立った光景から始まるが、他の三人の詩はいずれもまず地上から見上げた塔の高さからうたい起こす。岑参は、

1塔勢如湧出　塔勢 湧き出づるが如く
2孤高聳天宮　孤高　天宮に聳ゆ

と、塔が地上から天空に向かって奔出するかのような上昇の勢い、力動感が写し取られる。儲光羲は、

1金祠起眞宇　金祠　真宇起ち
2直上青雲垂　直に青雲の垂(へり)に上る

「金祠」の語はよくわからないが、宗教的な聖なる地をいうのだろう。そこに立つ「真宇」が塔。杜甫の詩は以下の四句によって唱い起こされる。

1高標跨蒼天　高標　蒼天に跨り
2烈風無時休　烈風　休(や)む時無し
3自非曠士懷　曠士の懷に非ざる自(よ)りは
4登茲翻百憂　茲に登りて百憂を翻さん

「高標」が慈恩寺塔を指すことは確かだが、地上の指標となるような高いしるし――岑参の詩に見える「塔」という具象的な建築物を意味する語を用いないことによって、あるいはまた儲光羲の「真宇」という宗教的な語を使わないことによって、塔は具象を越え、仏寺を越えて、より広い世界のなかに屹立する存在となる。慈恩寺塔は天界と地上界を結ぶ象徴的存在なのだ。

蒼天との関わりを「跨」というのも、独自である。岑参の「孤高　天宮の聳ゆ」、儲光羲の「直に上る青雲の垂」が、いずれも地上から上に向かってそびえ立つのを言うのに対して、杜甫は上から天を押さえつけるような、まるで天空を凌駕するかのように力強いものとして捉える。

より大きな差異は、高いことに対して杜甫の詩のみが不安、恐れを覚えていることである。高い空中に屹立し、向かい来る風に抗している塔の姿は、杜甫にとって勁さとともに人に不安を覚えさせる存在でもある。詩の全体を通して、諸公の作には清浄な区域に対する敬虔な思い、穏やかにそれを受け入れる心情が流れている。塔のそびえ立つ姿についても、高適は、

3登臨駭孤高　登臨して孤高に駭き
4披拂忻大壯　披払　大壯を忻(よろこ)ぶ

上から眺めると塔が一つ突っ立つのに驚き、風にあおられながらその壮大さを楽しんでいる。岑参の末尾、仏道への帰依を語る19から22の四句も、清浄なこの地に心の落ち着き、安らぎを得たことを物語る。儲光羲は、

3地靜我亦閒　地静かにして我も亦た閑
4登之秋清時　之に登る　秋清の時

周囲の静寂は心にも安らぎを与え、秋晴れの日の登攀にのびやかな気分を覚えている。

このように他の三者はいずれも慈恩寺の訪問をゆったりと味わっているのに対して、杜甫の詩のみはそうでない。怯えといってもよいような不安定な気分に最初から最後まで包まれている。この違いは杜甫と諸公を分かつ大きな差異である。

四、塔に登る

地上で見上げた塔を登る行動について、岑参は

3登臨出世界　登臨　世界を出で
4磴道盤虚空　磴道　虚空に盤（わだかま）る

上に登って見下ろすと、俗界の外へ出たかのよう、そこへ至る階段が中空に螺旋状に続く。儲光羲は塔に登ることを、先述3・4両句で穏やかに、あっさりと述べる。

一方、杜甫に至っては、

7仰穿龍蛇窟　仰ぎて龍蛇の窟を穿ち
8始出枝樺幽　始めて枝樺の幽なるを出づ

下から振り仰ぎながら、塔の内部の木組みを穿つように登って行く。塔の内部は「龍蛇の窟」にたとえられる。材木が入り組んだ暗い空間をくぐり抜けてやっと上に出られる。このように塔のなかを登って行く過程に句を費やすのは、杜甫の詩にしか見られない。叙述のなかに組み入れたのは、登る過程が杜甫にとっては意味をもつからである。龍蛇の窟の如き暗い空間を通り抜けることによって、初めて別の世界に到達することができる。地上の世界から塔上に到達するまでの洞窟の通過は、一種のイニシエーションの如き意味をもっていたのではないか。この過程を含むことによって、地上と塔上の二つの世界は決然と区別されることになる。

五、塔の上

杜甫が通過儀礼を経て到達した塔上は、この世とはまったく異なる天界であった。

9七星在北戸　七星　北戸に在り

10河漢聲西流　河漢　声は西に流る
11羲和鞭白日　羲和　白日に鞭うち
12少昊行清秋　少昊　清秋を行なふ

北斗七星は塔の上の北側の戸口に「在」る。天空の星が自分から近いのではなく、そこに、自分と同じ場所に、存在しているのだ。つまり自分と北斗七星は同一の空間にある。すでに杜甫は天界に身を置いている。「河漢」、天の河は河であるゆえに水が流れている。水が流れているゆえにその音が聞こえる。地上の川が東へ流れるのとは逆に、天上の川は西へ流れる。西へ流れるその水音が聞こえる。日常的な感覚でいえば、天の河の水音が聞こえるはずはない。黄生は「声の字、理無きに似たり」、しかし天に近いので聞こえたような気がしたのだろうという。(7)このように現実に引きずり下ろして解釈すべきではなく、このまま受け取ることによってこそ天界世界にいることを感取できる。9・10の二句は視覚・聴覚という感覚によって、自分が天上世界にいることを語っている。

太陽の御者羲和は鞭をくれて日輪を運行する。秋の神である少昊は天界で秋を司っている。羲和や少昊も杜甫のいるのと同じ場で彼らの仕事を執り行っている。天界に自分がいることを語るこの四句には、「の如し」といった比喩を明示する語は用いられていない。比喩を明示した場合、話者は現実の場に足を置き、描写の対象はそれとは次元を異にする世界に置かれるが、比喩を示さないこの言い方は話者自身が直接の感覚として知覚していること、話者が天上世界にいることを示す。

塔が高いことをいうに際しても、他の諸公は現実の世界から離れることはない。高適は、

5言是羽翼生　言(ここ)に是れ羽翼生じ
6迥出虚空上　迥かに虚空の上に出づ
7頓疑身世別　頓かに身世別るるかと疑ひ
8乃覺形神王　乃ち形神の王(さか)んなるを覚ゆ

と、塔の上の自分を鳥になって虚空に出た、俗界とは別れたかのような気になり、心身ともに躍動を覚えるという。

岑参は、

7四角礙白日　四角　白日を礙(さまた)げ
8七層摩蒼穹　七層　蒼穹を摩す
9下窺指高鳥　下に窺へば高鳥を指さし

10俯聴聞驚風　俯して聴けば驚風を聞く

塔の四隅が太陽を遮り、七層の楼が青空を擦るは、塔の高さを言おうとするが、塔は上なる「白日」「蒼穹」に対して接触はしても一つの世界に溶け込んではいない。

儲光羲は、

7誰道天漢高　誰か道ふ　天漢高しと
8逍遥方在茲　逍遙　方に茲に在り
9虚形賓太極　虚形　太極に賓し
10攜手行翠**微**　手を携へて翠**微**に行く

天の河は高いといわれるほどのことはない。まさに今散策しているこの場所。肉体が太極宮を訪れ、手を取り合って翠微宮に赴く——儲光羲も天漢・天宮に身を置いていることをいうが、概念的な語が多いためもあって、実感に乏しい。杜甫が視覚・聴覚といった感覚で天界にいることをあらわしていたのとは逕庭がある。

三者が現実から離れることなく塔上の世界を描くのに対して、杜甫のみはもはや天界に身を置いている。これに先立って登る過程を描いた7・8の二句は、異界に移るために必要な手続きでもあったことがわかる。

六、塔から見た風景

塔上から俯観した地上の風景の描写も、塔の登った者誰もが書かざるを得ないものである。岑参は言う、

11連山若波濤　連山　波濤の若く
12奔湊似朝東　奔湊して東に朝（てう）するに似たり
13青槐夾馳道　青槐　馳道を夾（さしはさ）み
14宮館何玲瓏　宮館　何ぞ玲瓏たる
15秋色從西來　秋色　西従（よ）り来たり
16蒼然滿關中　蒼然として関中に満つ
17五陵北原上　五陵　北原の上
18萬古青濛濛　万古　青濛濛たり

連なる山々は波が走るように一斉に東に向かう。槐の街路樹が両側から挟む都大路、厳かな宮殿、眼下に見える物を一つひとつ描き、さらに一帯に充満する秋の気、そして青くこんもり

とたたずむ御陵。

高適は、

9宮闕皆戸前　宮闕　皆な戸の前
10山河盡簷向　山河　尽く簷（のき）に向かふ
11秋風昨夜至　秋風　昨夜至り
12秦塞多清曠　秦塞　清曠多し
13千里何蒼蒼　千里　何ぞ蒼蒼たる
14五陵鬱相望　五陵　鬱として相ひ望む

9・10の「戸」や「簷」は慈恩寺塔の上のそれであって、杜甫の詩では「戸」は「七星　北戸に在り」、天界にあるものであったが、高適では逆に地上の宮殿が「皆な戸の前」、すぐ直前にある。つまり上から見下ろすと宮殿がすぐ間近に見えることをいう。塔の最上の場所も地上に接している。そして秋の清らかな気配に下界は包まれ、御陵も眺められる。

儲光羲の詩の地上の光景は、

5蒼蕪宜春苑　蒼蕪　宜春苑
6片碧昆明池　片碧　昆明池

「宜春苑」「昆明池」といった都の苑、池が固有名詞によって挙げられ、こんもりと青みがかった苑、一片の碧色として目に映る池が描かれる。

以上の三者は上から見た都の景――山々、宮殿、御陵などをいずれもくっきりと目に像を結ぶものとして捉える。高所から俯観すると、地上の様子がありありと見えるのは日常的な経験であり、鳥瞰することによって可能になる鮮明な像である。

ところが杜甫の見た地上の景はそれらとまったく異なる。

13秦山忽破碎　秦山　忽ち破砕し
14涇渭不可求　涇渭　求む可からず
15俯視但一氣　俯視すれば但だ一気
16焉能辯皇州　焉んぞ能く皇州を弁ぜんや

三者が個々に挙げていた宮殿、街路、御陵などはいっさい取り上げられない、というより見えないのだ。いずれが涇水か渭水か、清濁を分かつはずの二つの川も見えず、「但だ一気」、一つの気に蔽われていて、「焉んぞ能く皇州を弁ぜんや」、すめらぎの居ます都を弁別することすらできない。つまり他の三者に

は鮮明に見えていた都の数々の場所が、杜甫にはいっさい見えない。日常的な経験に即せば、高い場所から見た景色を手に取るようにまざまざと見られるということも、また逆にあまりの高さゆえにいっさいが茫漠として見えないということも、双方ともありうるではあろう。しかし杜甫の「地上が見えない」ことは経験的に捉えるべきではない。塔の上に出てすでに天界に入った杜甫にとって、地上は遠い遙かな別の世界、見えない世界になってしまっている。可視と不可視が逆転している。

上に引いた四句の始めに置かれた「秦山　忽ち破砕す」、この一句ははなはだ特異である。「秦山」は諸注がいうように指す所は終南山であろうが、終南山という具体的固有名詞を避けることによって、秦山は象徴的な意味を強め、長安の鎮めである存在が崩壊することを語る。杜甫はその秦山が崩れてばらばらになる映像を幻視している。[8] 杜甫の目に「破砕」と映ったのは、この詩の冒頭から流れている恐れ、怯えを端的にあらわすものであろう。

ところでこの「秦山」の語、宋本には一に「泰山」に作るという本があったらしい。『杜臆』では「須溪（劉辰翁）は樊本に拠りて定めて「泰山」と為すも、謬り甚だし」と否定する。[9] 以後も「泰山」を支持する説は見られず、「秦山」と並ぶ「涇渭」が長安の川であり、「皇州」が帝都であることから、合理的には「秦山」が妥当であって、字形の似ていることから生じた誤りではあろう。しかし鎮めの崩壊という点から見たら、「秦山」よりも「泰山」のほうがいっそう大きな崩壊となる。都に限定されず、中国全体に拡がることになる。

他の諸公には明瞭に見えていた、塔上から眺めた都の様相、それが杜甫には見えなかっただけではなく、「秦山忽ち破砕す」という現実を越えた光景を見る。宮殿、御陵、街路やそこに並ぶ樹木、そうした都を構成する要素が見えないことには、二律背反的な心情が含まれているかのように思われる。栄華の都から拒絶されたいらだちと、それとは反対に拒絶したい思い。地上が茫漠としたなかに包まれて見えないことは、自分が天上の高みにあることを誇らしげに語るものではない。地上の存在物が弁別できないことに、杜甫はいらだち、不安を覚え、悲しんでいるかのようだ。都にありながら都や宮廷から拒絶されている自分。しかし一方で「秦山忽ち破砕す」のように、秩序の象徴としての山が崩壊することへの欲求、破壊への期待も暗に伴っているのではないか。この四句にはそうした相い反する思いが絡み合っているかのように思われてならない。

七、不安、怯えの光景

杜甫の詩は下界が見えないことを言う句に続いて、恐れ、怯えが絶望の様相を帯びてさらに繰り広げられる。

17迴首叫虞舜　首を迴らして虞舜に叫べば
18蒼梧雲正愁　蒼梧　雲　正に愁ふ
19惜哉瑤池飲　惜しい哉　瑤池の飲
20日晏崑崙丘　日は晏る　崑崙の丘

地上が見えないことに絶望した杜甫は、さらに遠くの地を、蒼梧へ、瑤池・崑崙へと視線を拡げる。しかし舜の葬られた蒼梧の地は雲に暗く悲しく閉ざされ、西王母の瑤池・崑崙も日がとっぷりと暮れて闇に沈んでいる。地上から拒絶された杜甫は、現実を離れた太古の聖王舜を、そしてまた西王母という聖域の人に接触したいという思いから視線を遠くに馳せるのだが、それも拒絶されてしまう。「首を迴らして虞舜に叫ぶ」のは、杜甫が何かを訴えたくて舜に向かう呼びかけである。しかし返答はない。ならば西王母へと向かうも「惜しい哉」、それももは

や日が暮れて見えはしない。長安からずっと南の蒼梧、西の果ての崑崙、いずれも雲や日没のために暗く閉ざされている。助けを求めても応えてもらえないことに、杜甫はいっそう絶望を深める。蒼梧・崑崙のような、慈恩寺から遠く隔たる空想世界への言及は、もちろん他の三者にはない。

杜甫の詩にはこれも三者にはない以下の四句でもって終わる。

21黄鵠去不息　黄鵠　去りて息まず
22哀鳴何所投　哀鳴　何の投ずる所ぞ
23君看随陽雁　君看よ　陽に随ふ雁は
24各有稲粱謀　各おの稲粱の謀有るを

ここには二種の鳥が登場する。「黄鵠」は古くは『荘子』逍遥篇に由来し、阮籍「詠懐詩」にたびたび登場する孤高の形象である。その特質は「孤」、独りで生きていること、世俗を離れ広大な空間を飛翔すること、孤立して悲哀を帯びるものの、自分のありかた、生き方を貫く強さをもつことなどが挙げられる。[10] 黄鵠などの「大きな鳥」に対して、これも『荘子』以来の「小さな鳥」、両者は対蹠的な関係にあり、「雁」は大きな鳥のほうに属するのがふつうだが、ここでは「黄鵠」と対比されて、

「稲粱の謀」、衣食の暮らし向きのために汲々とする小さな鳥であろう。「黄鵠」と「雁」を対比的に捉えるのが通行する解釈であるが、それと異なる説を趙次公が提起している。官を求めて得られない杜甫自身というのである。[11] 杜詩の詩が定型から逸脱しているために生じた別解であろうが、しかし「隨陽の雁」といった言い方は、権力に追随して物質的利益を求めるもので、やはり貶める意を帯びているように思う。

詩の冒頭で記された、風を受けて屹立する慈恩寺の塔、それはまさしく「黄鵠」の姿と重なり合う。風に抗して立つことも杜甫の愛用するところであるが、この詩では身を休める場もなく悲しい飛翔を続ける孤独な黄鵠は、吹き付ける激しい風に向き合って独り立ち尽くす慈恩寺塔のメタファーとはいえないだろうか。そしてそれはとりもなおさず、杜甫自身の姿でもある。つまり杜甫の「慈恩寺塔」詩には、他の三者に見られないものとして、慈恩寺塔と黄鵠を重ね、さらに自分と重ねるという二重三重のメタファーが含まれている。とはいえ、黄鵠の孤高の姿に自分を重ねることで、自足したり、あるいは自分の生き方を力強く主張するといった思いは稀薄である。黄鵠でしかない自分にいらだち、不安やおびえを覚えているというべきだろう。そのために他の三者は悠々と楽しんでいた登攀が、杜甫だけは恐れや憂愁を帯びているのである。

八、寓意的解釈

慈恩寺塔の登攀と直接関わりのなさそうな舜、西王母の登場は、いかにも寓意性を帯びるかに見え、そのために以前から寓意を読み解く解釈がある。その代表というべきは、『苕溪漁隱叢話』前集巻一二に引かれる「三山老人」の説である。「三山老人」とは『苕溪漁隱叢話』の撰者胡仔の父である胡舜陟の号という。

三山老人語録云、登慈恩寺塔詩、譏天寶時事也。山者、人君之象。「秦山忽破碎」、則人君失道矣。賢不肖混殽而清濁不分、故曰「涇渭不可求」。天下無綱紀文章、而上都亦然。故曰「俯視但一氣、焉能辨皇州」。於是思古之聖君不可得、故曰「回首叫虞舜、蒼梧雲正愁」。是時明皇方耽于淫樂而不已、故曰「惜哉瑶池飲、日宴崑崙丘」。賢人君子多去朝廷、故曰「黄鵠去不息、哀鳴何所投」。惟小人貪竊禄位者在朝、故曰「君看隨陽雁、各有稻粱謀」。

三山老人語録に言う、「慈恩寺の塔に登る」詩は、天宝年間の時事を批判している。「山」というのは人君の象徴である。「秦山忽ち破砕す」とは人君が道を失ったこと。賢人愚者が入り交じって清濁の区別がつかなくなったので、「涇渭　求む可からず」という。天下には手本となる言葉もなく、都も同じだ。そこで「俯視すれば但だ一気、焉んぞ能く皇州を弁ぜんや」という。そうして古の聖君を思い浮かべても会うことはできない、そこで「首を回らして虞舜に叫ぶも、蒼梧は雲正に愁ふ」という。この時期、玄宗は淫楽に耽ってやむこともなかった、そこで「惜しい哉　瑶池の飲、日は宴（晏）る崑崙の丘」という。賢人君子はみな朝廷を去った、そこで「黄鵠去りて息まず、哀鳴　何の投ずる所ぞ」という。惟だ禄位を貪り窃む小人だけが朝廷にいる、そこで「君看よ　陽に隨ふ雁、各おの稻粱の謀有るを」という。

三山老人は13以下のすべての句について、それが何を寓意しているものか一つひとつ明らかにしている。一言でまとめれば「天宝の時事を譏る」ことになる。過去の注釈でそれとはやや異なるものは、虞舜について『杜詩詳注』が引く『杜詩博議』は唐の太宗をいうとする。趙次公はその父である高宗とする。誰を指すかに個々の違いはあっても、杜詩の後半は当時の皇帝以下の官界を指し、且つそれを批判するというのが、おおかたの一致する解釈である。この受け止め方は今日にまで及び、莫礪鋒氏は四人の作のなかで、三人が個人の感懐をうたうことに終始するのに対して、杜甫の詩だけが「国家の命運の危機」を覚えていることを高く評価する。[12] 確かに杜甫全体の特質は自己の不幸に留まらず、それを世のなか全体の不幸として悲嘆するところにある。しかしこの詩に限っては解しかねるところがのこる。楊貴妃との歓楽に覚える玄宗を批判するというが、天宝十一載の時点でそれは世間に広まっていたのであろうか。

時局批判説に対する反論もないではない。浦起龍は三山老人の時事諷刺の説を挙げたあと、「邵長蘅は之を非とす。祇だ是れ登高の警語のみ」と記す。[13] 批判・寓意を外して読めばよいということなのだろう。また何焯も三山老人の寓意説を穿鑿として退け、慈恩寺塔の登る詩であることを忘れたものだと批判する。[14] とはいえ、いかにも寓意性を帯びているかに思われる語句に出会うと、それが何を指しているか知りたくなるのも無理はない。ただしかし、表の意味の裏に実際の誰を、何を指しているかを知ることが詩を読むことではないことも確認しておきたい。確かに杜甫の詩のみが塔に対して畏怖を覚え、全体が暗く、

不安な色調を帯びている。しかしそれは現実の何かを指すというよりも、もっと抽象性を帯びた不安、さらにいえば世界のなかに自分がさらけ出されたような心のざわめきをいうかのように思われる。

本稿の冒頭に、文学批評は作品を評価することではないと述べた。この読解を通して、杜甫の詩がすぐれていると言う判断は控えたいが、少なくとも杜甫の詩のみが特異であることは確かだ。他の三者は寺院を訪れた詩としての定型にかなう、穏やかな作といえよう。杜甫の詩は諸注の解釈がさまざまに分岐するように、わかりやすいものではない。わかりにくいのは、詩が求めるかたちから逸脱しているからである。本稿でも十分な読解に達してはいないが、ただ杜甫の詩のみが不安、おびえを伴っていることは指摘しておきたい。慈恩寺塔に托して、彼の胸中に去来する穏やかならざる種々の思いが全篇に流れているのである。

まだしかるべき地位を得ていない五人が一堂に会して詩を作る時、高官の詩会に伴う社交性は不用だろう。同年配の人たちの間で競作すれば、当然競争意識も伴うことだろう。一足遅れて参加した杜甫には、従来の定型を破ろうとする意図が働いたことも考えられる。後世には杜甫を随一とする評価がこぞって寄せられているが、憶測すれば果たして当時において他の四人は杜甫の詩を理解し、評価しただろうか。あまりにも異質な杜甫の詩は周囲から怪訝な目で見られたのではないだろうか。

注

（1）杜詩の引用は宋本『杜工部集』による。杜甫の詩題の前の算用数字は、仇兆鰲『杜詩詳注』による巻数と巻のなかにおける順番を示す。『詳注』を用いるのは、一般に広く通行していることと、巻数によってだいたいの制作時期がわかる便のためである。

（2）『詩藪』外篇巻四に、「唐人毎同賦一題、必推擅場。……若高適・岑参・杜甫同賦慈恩寺三古詩、賈至・王維・杜甫・岑参同賦早朝四七言律、……、皆才格相当、足可凌跨百代。就中更傑出者、則慈恩、当推杜作。早朝、必首王維。……」

（3）黄生『杜詩説』巻一。

（4）『唐詩別裁集』巻一。

（5）『杜詩詳注』巻二に、「杜於末幅、另開眼界、独闢思議、力量百倍於人」。

（6）楊倫『杜詩鏡銓』巻一。

（7）黄生『杜詩説』巻一に、「河漢声西流、声字似無理。不知正形容登時去天尺五、若或聞之耳」。

（8）「秦山忽ち破砕す」については、福永光司「中国における天地崩壊の思想―阮籍の「大人先生歌」と杜甫の「登慈恩寺塔詩」によせて」（『吉川博士退休記念　中国文学論集』、筑摩書房、一九六八）が、阮籍との関連で考察している。

（9）明・王嗣奭『杜臆』巻之一。

（10）阮籍「詠懐詩」の「大鳥」の形象および「小鳥」との対比については、川合「阮籍の飛翔」（初出一九七八、『中国古典文学彷徨』、二〇〇八、研文出版、所収）に記したことがある。

（11）『杜詩趙次公先後解輯校』甲帙巻四に、「而我之俯世徇身、則未免弱雁之謀稲粱也。亦以自傷矣」。

（12）莫礪鋒『杜甫評伝』第二章（一九九三、南京大学出版社）。莫礪鋒・童強『杜詩選評（上）』（『杜甫研究学刊』二〇一八年第一期）。莫礪鋒・童強『杜甫詩選』（二〇一八、商務印書館）。

（13）『読杜新解』巻一之一。邵長蘅の批評は浦起龍の引用以上には見られなかった。

（14）何焯『義門読書志』巻五一に、「迴首以下、或有所托。前半若如三山老人、遽妄爲穿穴、是忘題目之爲登塔也」。

補：注（8）福永氏の論文については、遠藤星希氏の教示と恵与を得た。また注（12）莫礪鋒氏の著書・論文については、黒田真美子氏から恵与された。併せて謝意を記す。

附：四者の詩は必要に応じて適宜、句番号とともに引いたが、全体を見るために以下に全篇を挙げておく。

岑参　「與高適・薛據登慈恩寺浮圖」「高適・薛據と与に慈恩寺の浮圖に登る」

1 塔勢如湧出　塔勢 湧き出づるが如く
2 孤高聳天宮　孤高 天宮に聳ゆ
3 登臨出世界　登臨 世界を出で
4 磴道盤虚空　磴道 虚空に 盤（わだかま）る
5 突兀壓神州　突兀として神州を圧し
6 崢嶸如鬼工　崢嶸として鬼工の如し
7 四角礙白日　四角 白日を 礙（さまた）げ
8 七層摩蒼穹　七層 蒼穹を摩す
9 下窺指高鳥　下に窺へば高鳥を指さし
10 俯聽聞驚風　俯して聽けば驚風を聞く
11 連山若波濤　連山 波濤の若く
12 奔湊似朝東　奔湊して東に朝（ちょう）するに似たり
13 青槐夾馳道　青槐 馳道を 夾（さしはさ）み
14 宮館何玲瓏　宮館 何ぞ玲瓏たる
15 秋色從西來　秋色 西從（よ）り来たり
16 蒼然滿關中　蒼然として関中に満つ
17 五陵北原上　五陵 北原の上
18 萬古青濛濛　万古 青濛濛たり
19 浄理了可悟　浄理 了として悟る可く
20 勝因夙所宗　勝因 夙に宗とする所
21 誓將挂冠去　誓ひて将に冠を挂けて去らんとす
22 覺道資無窮　覚道 無窮に資せん

高適　「同諸公登慈恩寺浮圖」　「諸公の慈恩寺の浮図に登るに同ず」

1 香界泯羣有　香界 羣有泯（ほろ）び
2 浮圖豈諸相　浮圖 豈に諸相あらんや
3 登臨駭孤高　登臨して孤高に駭き
4 披拂忻大壯　披拂 大壯を忻ぶ
5 言是羽翼生　言（ミ）に是れ羽翼生じ
6 迴出虚空上　迴かに虚空の上に出づ
7 頓疑身世別　頓かに身世別るるかと疑ひ
8 乃覺形神王　乃ち形神の王（さか）んなるを覚ゆ

9 宮闕皆戸前　宮闕　皆な戸前
10 山河盡簷向　山河　盡く簷向
11 秋風昨夜至　秋風　昨夜至り
12 秦塞多清曠　秦塞　清曠多し
13 千里何蒼蒼　千里　何ぞ蒼蒼たる
14 五陵鬱相望　五陵　鬱として相ひ望む
15 盛時慙阮步　盛時　阮歩に慙じ
16 末宦知周防　末宦　周防を知る
17 輸效獨無因　輸效（ゆしこう）　獨り因無し
18 斯焉可游放　斯焉に游放す可し

儲光羲「同諸公登慈恩寺塔」「諸公の慈恩寺の塔に登るに同ず」

1 金祠起眞宇　金祠に真宇起ち
2 直上青雲垂　直に青雲の垂に上る
3 地靜我亦閒　地静かにして我も亦た閑
4 登之秋清時　之に登る　秋清の時
5 蒼蕪宜春苑　蒼蕪　宜春苑
6 片碧昆明池　片碧　昆明池
7 誰道天漢高　誰か道ふ　天漢高しと
8 逍遥方在茲　逍遥　方に茲に在り
9 虛形資太極　虛形　太極に資し
10 携手行翠**微**　手を携えて翠**微**に行く
11 雷雨傍杳**冥**　雷雨　傍に杳**冥**
12 鬼神中**�**　鬼神　中に**躋**たり
13 靈變在倏忽　靈變　倏忽に在り
14 莫能窮天涯　能く天涯を窮むる莫し
15 冠上閶闔開　冠上　閶闔開き
16 履下鴻雁飛　履下　鴻雁飛ぶ
17 宮室低邐迤　宮室　低くして邐迤
18 羣山小參差　羣山　小さくして參差
19 俯仰宇宙空　俯仰すれば宇宙空し
20 庶隨了義歸　庶はくは了義に隨ひて帰せん
21 崩男非大厦　崩男（しょくりょく）　大厦に非ず
22 久居亦以危　久しく居るは亦た以て危し

杜甫「同諸公登慈恩寺塔」「諸公の慈恩寺の塔に登るに同ず」

（原注）時高適薛據先有此作　時に高適・薛拠、先に此の作有り

1 高標跨蒼天　高標　蒼天に跨し
2 烈風無時休　烈風　休む時無し
3 自非曠士懷　曠士の懷に非ざる自りは
4 登茲翻百憂　茲に登りて百憂を翻さん
5 方知象教力　方に知る象教の力の
6 足可追冥搜　冥搜を追ふ可きに足るを
7 仰穿龍蛇窟　仰ぎて龍蛇の窟を穿ち
8 始出枝樟幽　始めて枝樟の幽なるを出づ
9 七星在北戸　七星　北戸に在り
10 河漢聲西流　河漢　聲は西に流る
11 羲和鞭白日　羲和　白日に鞭うち
12 少昊行清秋　少昊　清秋を行なふ
13 秦山忽破碎　秦山　忽ち破碎し
14 涇渭不可求　涇渭　求む可からず
15 俯視但一氣　俯視すれば但だ一氣
16 焉能辯皇州　焉んぞ能く皇州を辯ぜんや
17 迴首叫虞舜　首を迴らして虞舜に叫べば

18 蒼梧雲正愁　蒼梧　雲　正に愁ふ
19 惜哉瑤池飲　惜しい哉　瑤池の飲
20 日晏崑崙丘　日は晏(く)る　崑崙の丘
21 黄鵠去不息　黄鵠　去りて息まず
22 哀鳴何所投　哀鳴　何の投ずる所ぞ
23 君看随陽雁　君看よ　陽に随ふ雁は
24 各有稲粱謀　各おの稲粱の謀有るを